

<書評>

John Knight 著

Waiting for Wolves in Japan: An Anthropological Study of People-Wildlife Relations.

Oxford, Oxford University Press, 2003 年, 312 頁, 63.00 UK ポンド

木村 奈津子*

人間と動物が築く関係はどのように捉えることができるのだろうか。キリスト教の教えのように、人間は全ての動物の頂点に立ち、彼らをコントロールしているのだろうか。それともエコ・システムはそれ自体でバランスを保てるという考えの下、人間は自然から身を引きその自律性にゆだねるべきなのだろうか。あるいは、人間と動物の間には区別などなく、我々と彼らはともに1つの生態系を形作り、同じ地球というニッチをめぐるライバルとして、限りある空間や資源を奪い合っているのだろうか。

人間が野生動物の棲む山や森に接して暮らしを営む場合、野生動物は常に人間の活動を脅かす存在であった。現在、人間の活動の拡大によって住処を奪われた野生動物は、家畜や農作物へ以前よりも一層大規模な被害や経済的損失をもたらしている。人間に害をなす「害獣」に対する人間側のリアクションは、直接的に被害を受ける農民の個々の対応から、動物の個体数のコントロールを目指す国家の介入、あるいは動物を守ろうとする保護運動など、規模も内容も目的も様々である。こうした人間と動物の多様な関係のあり方だけでなく、その関係のあり方を捉える複数の立場が複雑に絡み合う現場である野生動物問題に焦点を当てたのが、人類学者によるエスノグラフィーである本書である。

これまでの社会科学の分野において、話すことができない動物は長い間脇役の地位を与えられてきた。社会科学が研究の対象として動物を取り上げる場合は主に、シンボルや表象など文化的創造物に関わる人間の思考の対象としての動物であり、その姿勢は人間中心主義的であったと指摘することができる。しかし近年、社会科学の対象として動物自体を捉える、あるいは人間と同等の存在として動物を分析の中心に据えようとする試みがいくつかなされている¹。野生動物の活動が人間の活動を阻み、被害をもたらし、人間に何らかのリアクションを起こさせるとき、動物は人間の単なる思考の対象から、人間とともに現実世界の形成に参加する存在となる。問題を引き起こす動物とそれに対応する人間とい

* 一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程

¹ こうした点を特に強調したのが *Regarding Animals*. [Arluke and Sanders 1996] である。また *Taking Animal Seriously: Mental Life and Moral Status*. [Degrazia 1996] などの動物福祉や動物の権利に関する議論は欧米を中心に盛んになっている。さらに人間と動物の関係を考察する *Animals and Human Society: Changing Perspectives*. [Manning and Serpell 1994] などのように、人間-動物関係の研究は様々な分野で取り組まれている。

う関係性、そこに見出せる人間と動物の相互行為を捉えようとする本書は、動物を扱う社会科学にどのような視座を提示してくれるのだろうか。

本書が対象とするのは日本における野生動物問題である。近年、日本でも山に隣接する地域では、イノシシやサル、シカ、クマなどによる農作物や植林への害が大規模になり、これらの動物が人間を襲うという事件も多発している。こうした野生動物害はマスコミに取り上げられることで周知のものになってはいるものの、実際の被害はより深刻であり、農家や林業関係者、山村の人々にとって野生動物による経済的損失は「死活問題」となっているという。著者は日本の野生動物問題が、人間と動物の「戦い」に例えられることに特に注目する。人間の領域に侵入し、田畑や植林を荒らし、人を襲い危害を加える動物は、我々人間の「敵」とみなされる。野生動物問題という繰り返される攻防は、人間と動物の「戦争」なのである。

野生動物害への対応の一つとして本書が取り上げるのが、ニホンオオカミ協会（JWA）が提案する「オオカミ再移入プロジェクト」である。現在の野生動物問題は、捕食者がいなくなり生態系の自然なバランスが崩れたことで生じている。こうした考えに基づいて JWA が提案したのが、20 世紀初頭に絶滅したオオカミを海外から再移入しようという計画である。著者は野生動物害とそれに直面する山村の人々の経験を、自らのフィールドワークを通して得たデータから紡ぎ出しながら、オオカミ再移入プロジェクトが提案された社会的、文化的、科学的な文脈と JWA の思想背景を明らかにし、それらに見出される日本の野生動物と人間の複雑な関係の諸相を描くことを試みている。

本書の構成は、序章と最終章で全体の理論的な問題提起と分析が提示され、1 章から 6 章までは具体的な細部の記述が続く形となっている。1 章で日本の山村と著者のフィールドである紀伊半島の様子が紹介されると、2 章以降は日本の野生動物問題で特に中心的な位置を占める 4 種の動物、イノシシ、サル、シカとカモシカ、クマにそれぞれ 1 章ずつ充てられる。各章では、それらの動物が日本においてどのように扱われているのか、それらが引き起こす被害、動物を巡る農家、ハンター、林業関係者、動物保護運動家の態度や実践、各々の立場の利害関係や思惑、被害に対する具体的な対応策や、マスコミや人々の語り、野生動物害に対して用いられる「犯罪」や「戦争」のイディオム、またそれぞれの動物の現在の一般的なイメージから、歴史資料や民俗資料にあらわれる日本文化におけるイメージまでと、広範な範囲にわたる日本人と動物の関わりについての記述と分析が繰り返されている。続く 6 章ではオオカミが取り上げられ、そのイメージや文化・歴史的な人間との関わり、絶滅の経緯などが説明された後、JWA の活動や試み、モットーや思想が描写され、著者の JWA の動きに対する分析が提示される。ここでは細部には立ち入らず、著者の論点を日本の野生動物問題の背景と、人間と動物の関係という 2 点に絞って紹介したい。

なぜ現在の日本で野生動物と人間の対立が激化しているのか。著者が幾度となく強調す

るのが、日本の野生動物問題を引き起こしている要因である。著者によれば日本の野生動物問題は、世界の様々な地域で起きているそれとはまったく逆の図式で起こっている。即ち、人間活動が拡大し、人間が野生動物の領域に侵入することで野生動物との軋轢が生じているのではなく、人間活動が縮小し、野生動物が人間の領域へ侵入することで引き起こされているのだという。日本では 1950 年代を境目に人口分布が大きく変化し農村部の過疎化が進んでおり、また若者の都市部への流出は山村部の高年齢者の割合を押し上げている。さらに産業構造の変化も農業従事者、林業関係者の人口減少に拍車をかけ、過疎化と相まって山村とそれに近接する里山での人間の活動を縮小させた。そもそも山と接していることで絶えず動物たちが侵入しようとしてくる山村は、人間の活発な活動によって山と村との境界が保たれる場所であったのに、人口の減少と人間活動の規模の縮小によって人間の自然に抗する力がなくなってしまった。このことが野生動物の侵略を容易にしている、というのが著者の主張である。

さらに人間が少なくなることで、朽ち果てていく廃墟や田畑には草木が茂り、森林が拡大するという景観の変化が起こっている。これは人間の領域が再び野生の領域へと戻っていくことであり、人々はこうした変化を自分たちの土地の喪失として経験しているという。野生動物問題は単に動物の跳梁だけでなく人間世界への自然の蔓延なのだ。人間が自然に抗する手段の 1 つであった狩猟は「間引き」、即ち増えすぎた動物の数をコントロールするという役割を担っていた。けれども現在の日本における狩猟は、過疎化によるハンター数の減少に加え、動物の禁猟指定や保護動物指定によって先細りになっている。そしてそのことが動物の数を制御できない状況に拍車をかけている。自然の世界がはびこる一方で、人々にはそうした自然をコントロールする術が残されていない。村人たちは、過疎化、産業構造の変化、狩猟の減少によって、自らが元々持っていた自然をコントロールし自然との境界を保つ力を失ってしまっている。それが現在の野生動物問題の要因なのである。

しかしながら著者はそれだけが要因であるとは考えない。著者によれば少なからぬ人々が、人間世界への自然の侵入の背後にはまず先に人間の森や山への侵入があったと感じているという。とくに人間が植林政策によって山や森の生態系を変え、動物達の住処を変容させたこと、この人間による山への侵攻が現在の野生動物問題の根幹にあると捉えられているのである。著者はこうした日本における野生動物問題や自然の侵入を「二重の侵入」とであると特徴づける。

日本の野生動物問題の特徴を述べた上で、著者は野生動物問題の背後に地方とそれを包摂する国という、よりマクロなアクターとの間の関係性を想定し、両者の断絶を提示する。植林政策も、過疎化の進行といった地方の衰退も、禁猟などの防衛手段の禁止も、動物から何の影響を受けることもない国の中央部にいる人々の手によるものである。野生動物害を抱える日本の山村部は、国からなおざりにされ、切り捨てられ、孤立無援な戦況におかれている。著者によればこれが野生動物問題の要因を作り出している背景なのである。

本書を貫くもう一点の主題は、人間と動物の関係である。序章で著者は、人間と動物の関係を捉えるため2つの観点を提示する。一つ目の観点として著者が挙げるのが、動物が人間に何らかの利益や不利益を与えるという要因によって人間との関係が決定される功利的関係である。動物を資源とし、肉体を有用なものとして用い、家畜として飼育する、あるいは病気を媒介し、人間の作物を荒らす害獣として敵視すること、これらはいずれも功利的観点に基づいている。本文中でも肉食、部位利用など資源としての野生動物の使用や、餌付け、狩猟といった人間と動物の関わりが数多く述べられている。こうした観点から見れば、野生動物害とは動物が経済的被害という不利益を人間にもたらすものであり、そこには利害関係という人間と動物の対立関係を見出すことができる。また、侵入してくる野生動物への対応策などのように、戦いの局面におかれる人間と動物は対面的、物質的、実利的な関係を築いているのである。

著者が二つ目に提示するのが、人間の精神的側面に力点を置く象徴的観点である。動物の豊かな表象や共有されるイメージ、キャラクター化、人間と動物の結びつき、人間社会のアナロジーとしての動物という図式には、人間と動物の象徴関係や観念上の関係を窺うことができる。さらに著者は一見経済的・物理的とみなされる野生動物問題を捉える上で、構造主義的な観念上の関係が有効であるとする。即ち野生動物が「害獣」として問題となるのは、彼らが境界侵犯を行うときである。野生動物が文化／自然の境界を侵犯し、野生の領域から人間の領域に入り込んでくること、そのことが動物を害獣とするメルクマールになるのだ。けれども著者は、こうした構造主義的な視点は、西洋的・カント的な文化／自然、人間／動物という二項対立や、それらの間の断絶を普遍的なものとして前提としていることを指摘する。著者は観念上のものから実利的なものまで、個人的なものから歴史的なものまでと、様々な人々の多様な動物との関係を描きながら、日本における動物と人間のゆるやかな連続性や人間による動物と自己の同一視という、西洋的思考では捉えきれない関係のあり方を描写する。

さらに著者はこうした描写を通し、日本の野生動物問題を捉えるためには象徴関係と功利関係のどちらか一方だけでは不十分であるとする。野生動物問題で動物が「敵」となるのは、それらの動物が人間と同じ空間を共有し、限られた土地や資源、食べ物などを巡って競合するライバル関係だからである。けれども野生動物問題はこうした人間と動物の同等な立場としての相互関係の中で起きていることであると同時に、人間が想像する自然と文化の境界が動物によって破られることでもある。野生動物が害をもたらすこと、それは境界が破られたことによりあるべき秩序が乱されることであり、動物が人間の世界に侵入するのは、山の秩序が乱れているからなのである。

ここまで提示してきた日本の野生動物問題の背景と人間－動物関係という著者による2つの論点は、オオカミ移入計画という点において交わることになる。著者が分析するJWAのオオカミ移入の目論見は、現代の日本の過疎化と野生動物害が相互に状況を悪化

させている悪循環の閉塞状態を打開するため、生態学的な知識に基づいた手段を提案することだけではない。オオカミ移入が既に実行されている欧米では、地元住民による肉食獣への恐怖や家畜を襲うオオカミへの反感から、地元村落とオオカミ保護を実施する国との間に大きな断絶が生まれている。けれども JWA は、オオカミが悪者ではなく良い動物として神聖視されていたという古来の日本文化を強調し、オオカミが古きよき日本文化のシンボルとなることで断絶する国家と地方とを文化的に統合することができるとする。オオカミの絶滅や森林生態を破壊する植林政策はすべて明治政府が無批判に受け入れた西洋的な自然観による。明治期以前のオオカミがいた日本の森こそ人間と動物と自然が調和を保って共生する日本の自然のあるべき姿であり、現代の日本人もそうした森と人間のあるべき姿に戻るべきなのだ、というのである。あるべき日本の森の姿を象徴するオオカミの再移入は、プラグマティックな害獣対策であるだけでなく、古きよき日本の文化を取り戻そうとする文化ナショナリズム的な側面を併せ持っている。これが著者の分析する JWA のオオカミ再移入の企図である。

以上にまとめたのが本書の概要と主な論点である。タイトルからもわかるように、本書は日本のオオカミ再移入計画に焦点を当てるとともに、その背景である日本人と野生動物の関係を描き出すことを目的としている。しかし、5章までの人間-動物関係と、6章のオオカミと人間の関係の議論の内容には微妙な断絶を感じざるを得ない。1章から5章にわたる本書の大部分の論述は、山村に住む人々によって経験される野生動物問題にあてられている。そこでは人間と対等な存在としての動物だけでなく人間の動物に対する豊かな象徴やイメージの世界が、非西洋の人間と動物の関係としてロマン化されることなく、人々の語りや実践から細密に描き出されている。一方、その対応策として提示されるオオカミ再移入案は、一つの団体が計画する実現するかどうかもわからない主張の一つに過ぎない。そこで描かれているのは、実際のオオカミと人間の関わりではなく、オオカミ移入計画の背後にあるオオカミをめぐる言説、イメージ、科学的知識、JWA の思想である。

「オオカミを待ちわびている」のは誰か。それは JWA のメンバーである。野生動物問題に実際に直面している山村の人々にとって、オオカミはおとぎ話の中のものでしかない。こうした JWA の目的・主張と山村の人々との断絶感を、著者の論述の断絶とをあえて対応させたのであれば、著者のその目論見は成功しているのかもしれない。しかし、最終的に象徴としてのオオカミに日本の野生動物問題を集約させてしまったことは、生身の形を持ち、人間と同様に世界に参与する動物たちを再び観念体系に押し戻してしまうことではないだろうか。

動物が人間の領土に侵入し、害をもたらすとき、あるいは動物と人間が空間と資源を巡って競合するとき、両者は同じ空間を占める存在として対等であり、一方の行為が他方の行為に影響を与える相互行為の相手となる。この点において、動物は観念上の存在でも人間の思考の対象でもなく、私たちとともにこの現実世界を構成する対等な存在となる。し

かしながら著者は、野生動物問題を経済的被害ではなく、象徴的な秩序が乱されること、中央部から取り残された山村とその将来の負の象徴として結論付ける。乱されたのは秩序であり、オオカミはその秩序を回復するための想像上のアイコンなのだ、と。日本の野生動物問題において、そこに見出せる人々のまなざしには確かに自然と文化の境界という概念が保たれている。著者の指摘は確かにその通りだと納得させられる部分も多い。けれども、結論が象徴的秩序という観念的な枠組みにたどり着いてしまったことで、対等な存在として描かれていた動物は再び背景へと押し戻されてしまう。ここで本書は再び人間中心主義の社会科学の領域へ舞い戻ってしまったのである。

とはいえ、野生動物と人間の関係の多様性を描き出すという本書の試みは達成されている。そこで描かれた多面的な関係のあり方は、人類学が動物と人間をどのように捉えるか、その射程を広げてくれるものである。また、人でもなくモノでもない動物を人間と対等な存在として扱うことは、アクターやエージェンシーといった概念を手がかりに人間以外のモノの語り方を模索する近年の社会科学に対し、新たな展望を示してくれるのではないだろうか。

参考文献

Arluke, Arnold and Cinton Sanders.

1996 *Regarding Animals*. Philadelphia: Temple University Press.

Degrazia, David.

1996 *Taking Animal Seriously: Mental Life and Moral Status*. Cambridge: Cambridge University Press.

Manning, Aubrey and James Serpell.

1994 *Animals and Human Society: Changing Perspectives*. London: Routledge.

(2009年2月2日 採択決定)